

第32回夏期福音特別集会 第1回集会（伊東）

即行の福音

——マルコ伝第1～3章——

1985年7月26日
小池辰雄

百行一死に如かず 罪の赦しの中へのバプテスマ 時は満ちた 神の国は近づいた 行為をもって身証せよ 直ちに福音 信行一如 始めに行行為ありき 聖靈の權威 キリストの無者十字架の門 キリストの新しさ 神の御意を行う者 キリストの中に（エイ・クリリスト）

【マルコ】

⁴ バプテスマのヨハネ出で、荒野にて罪の赦を得さる悔改のバプテスマ

^{のべつた}
を宣伝う。……

¹⁰ 斯て水より上るおりしも、天さけゆき、御靈、鵠のごとくに降るを見給う。

¹¹ かつ天より声出づ『なんじは我が愛くしむ子なり、我なんじを悦ぶ』……

¹⁵ 『時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』

¹⁶ イエス、ガリラヤの海にそいて歩みゆき、シモンと其の兄弟アンデレとが、海に網投ちおるを見給う。かれらは漁人なり。¹⁷ イエス言い給う『われに従いきたれ、汝等をして人を漁る者とならしめん』¹⁸ 彼ら直ちに網をすてて従えり。¹⁹ 少し進みゆきて、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとを見給う、彼らも舟にありて網を繕いいたり。²⁰ 直ちに呼び給えば、父ゼベダイを雇人とともに舟に遣して従いゆけり。

²¹ 斯て彼らカペナウムに到る、イエス直ちに安息日に会堂にいりて教え給う。²² 人々その教に驚きあえり。それは学者の如くならず、權威ある者のごとく教え給うゆえなり。²³ 時にその会堂に穢れし靈に憑かれたる人あり、叫びて言う、²⁴『ナザレのイエスよ、我らは汝と何の関係あらんや、汝は我らを亡さんとて来給う。われは汝の誰なるを知る、神の聖者なり』……

²⁹ 会堂をいで、直ちにヤコブとヨハネとを伴いて、シモン及びアンデレの家に入り給う。³⁰ シモンの外姑、熱をやみて臥したれば、人々ただちに之をイエスに告ぐ。³¹ イエス往きて、その手をとり、起こし給えば、熱さりて女かれらに事か。

³² 夕となり、日いりてのち人々すべての病ある者・悪鬼に憑かれたる者をイエスに連れ來り、³³ 全町こぞりて門に集まる。³⁴ イエスさまざまの病を患う



多くの人をいやし、多くの悪鬼を逐いだし之に物言うことを免し給わず、悪鬼イエスを知るに因りてなり。

³⁵朝まだ暗き程に、イエス起き出でて、寂しき処にゆき、其処にて祈りいたもう。……

⁴²直ちに癪病さりて、その人きよまれり。
⁴¹イエス憫みて、手をのべ彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言ひ給えば、

【マルコ2】

⁸イエス直ちに彼等がかく論ずるを心に悟りて言い給う『なにゆえ斯ることを心に論するか、⁹中風の者に「なんじの罪ゆるされたり」と言うと「起きよ、床をとりて歩め」と言うと、いづれか易き。¹⁰人の子の地にて罪を赦す権威ある事を汝らに知らせん為に』——中風の者に言い給う——¹¹『なんじに告ぐ、起きよ、床をとりて家に帰れ』……

¹⁷イエス聞きて言い給う『健やかなる者は、医者を要せず、ただ病ある者これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪びとを招かんとて来れり』

……

²²誰も新しき葡萄酒を、ふるき皮袋に入ることは為じ。もし然せば、葡萄酒は袋をはりさきて、葡萄酒も袋も廢らん。新しき葡萄酒は、新しき皮袋に入るるなり

【マルコ3】

²⁷誰にても先ず強き者を縛らずば、強き者の家に入りてその家財を奪うこと能わじ、縛りて後その家を奪うべし。²⁸誠に汝らに告ぐ、人の子らの凡ての罪と、けがす瀆しとは赦されん。²⁹然れど聖靈をけがす者は、永遠に赦されず、永遠の罪に定めらるべし。……

³¹ここにイエスの母と兄弟と來りて外に立ち、人を遣してイエスを呼ばしむ。³²群衆イエスを環りて坐したりしが、或者いう『視よ、なんじの母と兄弟・姉妹と外にありて汝を尋ぬ』³³イエス答えて言い給う『わが母、わが兄弟とは誰ぞ』³⁴かくて周囲に坐する人々を見回して言い給う『視よ、これは我が母、わが兄弟なり。誰にても神の御意を行うものは、これわが兄弟、わが姉妹、わが母なり』

●百行一死に如かず

皆さん、よくいらっしゃいました。「一日千年」といいますが、非常に短いたつた三日間ですけれども、その内容を皆さん自身が永遠的なものにしていただきたい。キリストの譬話に、招かれた者が何のかんのいろんな理由があつて、来なくなつて、



とうとう一人も来ない。しかたがないから、

「籬の外から何でもいいから中に入れる。天国はそんなもんだ」という凄いお言葉がありますが、いわゆる聖国の子らが嘆きはがみする。

「アブラハムの裔^{すえ}なんて言つたってダメだ」

と。福音は、いかなるこの世の理由をも蹴飛ばして出て来なければダメなんです。どうなつたつていいんです。

「瞬間をつかまえる者は本当の人間だ」

とゲーテも言いましたが、この三日間はそういう瞬間です。借錢してでも出て来ていい。学生は金がなければ、一昼夜歩いてでも出て来てい。キリストの福音というのはそういうものだ。生命賭けというのは文字通りそうなんです。

今回はマルコ伝の中から、四か所、マルコ伝らしいところを選んでお話をします。福音書の中ではマルコ伝が一番土台になっている。1章から3章までの間で、しかるべき導かれてお話をいたします。

「即行の福音」と題した。こんな題は私は初めてです。マルコというのは別の名前はヨハネとも言う。ペテロのお弟子さんです。従兄弟にバルナバがいました。ペテロの伝道に随伴して行つた。それは使徒行伝13章をご覧になると分かります。ペテロがマルコに口授したわけです。これを口伝えで、マルコが筆記した。だから、これを「ペテロの福音書」とも別名言われるくらいです。大体、ローマのクリスチヤンを相手にしたらしい。ユダヤのいろんな習慣や地名など、預言者のことなど、大分わかるように書いてある。ただし、マルコ伝では、キリストの言葉、教え——いわゆる「教訓」——これは極めて少ない。

著作集第一巻の『無者キリスト』、あれはぜひ読みかえしてください。マルコがキリストの行為面を非常によく書いた。ルカ伝は心の面。マタイ伝は言葉。ヨハネ伝は霊。行、心、言、靈と、おおざつぱに言うと、そんなわけです。マルコ伝は、芸術でいうと彫刻の世界です。非常に立体的に目に見える。ルカ伝は絵画的な世界。マタイ伝は詩的な世界。ヨハネ伝は音楽。そんな感じがします。

「神の言はその奥の響きだ」

と私はよく言うでしょ。響きの世界は、芸術の中でも音楽は、ある意味において最高かも知れません。

私は『エン・クリスト』誌（21号）に書いた。

「百聞一見に如かず、百行一死に如かず」

と。「行」の極まるところは「死」です。一番人間を打つものは、この「行為」なんです。「何を言つたか」じゃない。「何をしたか」です。福音の土台は行為である。私はいわゆる觀念プロテスタンント・キリスト教には反対です。「愛」なんていつたって、感情だけではどうにもならない。愛も行為でなければダメなんだ。



● 罪の赦しの中へのバプテスマ

バプテスマのヨハネ出^いで、荒野にて罪の赦を得^{ゆるし}する悔改^{くいあらため}のバプテスマを宣傳^{のべつた}う。

1章4節に、「罪の赦しを得さする」という訳がしてあります。原文でいいますと、「罪の赦しへの悔改めのバプテスマ、罪の赦しの中へのバプテスマ」です。「悔改め」は、申し上げているとおり、「回帰」です。回心よりももつと行為的なんです。回心は心の世界。回帰――^{めぐら}回り帰る――全身で帰ることが本当の悔改めなんです。

キリストの許^{もと}に、神の許に全身をもつて帰つていく。これが行為です、全身の行為です。坐つていて「ただ心で」なんてな、そんな世界じゃない。身体^{身體}ごと動いて行く。その中に入つて行く。罪の赦しの中へ入つて行く。だから、罪の赦しの中へ入る。この場合は水の中に入るんだ。そういうバプテスマ。

ところが、入るけれども、なかなか人間というものは、また戻つて来たり、行きつ戻りつなんて、本当の回帰はできない。私たちはできるような顔しているけれども。

本当の回帰をしたのは、このキリストだけです。ヨルダンの小川でキリストは本当の回帰をなさつた、我々のために。彼は、帰り行く必要はないんだけれども、必要がない人が実は最も素晴らしい回帰をなさる。その回帰が本ものであると、聖靈が臨む。他の連中は、いくらここでもつてバプテスマを受けても、聖靈が臨まない。キリストだけに聖靈が臨んだ。キリストの回帰がいかに本ものであるかということが分かるわけです。

本当に神さまの中に帰つた。水の中に入ることは、神の中に入ること。キリストは中に入ると、全く自分を

「我れ無き者」

にしてしまつてゐるわけです。それだから、私は「無者」という。完全に無我、無私です。キリストが水の中に溶け込んでしまつて、どこにキリストがいるか、というようなわけだ。そして、水から上がつていらつしやると、聖靈が鳩の如く臨んで天から声が出た。

「汝はわが愛しむ子なり、我なんじを悦ぶ」

と。完全に帰つたから、神さまは悦んだ。いい加減な帰り方ではしようがない。これはみんな――模範を示したんじやない――我々の為に代わつて回帰したんです。

「本当に回帰すると聖靈が臨むぞ」

ということです。それでは、

「困つたなあ、我々は本当に回帰するためにはどうしたらいいか」と、その問題はもう少し後まわしにします。

¹⁰斯^{かく}て水より上るおりしも、天さけゆき、御靈^{みたま}、鴿^{はと}のことく己に降^{くだ}るを見給う。

この「天さけゆき」という言葉が凄い。靈的な現象です。これはイザヤ書にも出でている。イザヤ書64章1節、



「願くはなんじ天を裂きてくだり給え。なんじのみまえに山々ふるい動かんことを」（イザヤ64・1）

「天を裂きてくだり給え」

という。天を裂きて聖靈がくだつて來た。

¹¹かつ天より声出づ『なんじは我が愛しむ子なり、我なんじを悦ぶ』本当に降参してくださいよ。本当に降参すると、キリストの愛が伝わってきます。絶対にこつちの資格じやない。

「参りました！」

と。人に何と言われようと、いつこう差支えない。神さまの前に、キリストの前に本当に降参すると、

「我なんじを悦ぶ」

と言われる。

私は聖靈の体験をする前は永いこと、そういうことは分からなかつた。ちょうど20歳の時に信仰に入つて——それが1923年だ——それから1950年まで、26、27年。聖靈の火花が、時々多少散つたように思う時はあつたけれども、本当に全身が満たされて聖靈に撃たれたのは1950年の秋の11月の3日、手島さんと一緒に集会をした時です。聖靈が天界から來た。坐つていて、身体がグーッと上がつたからね。それが

「天さきて聖靈が臨んで」

全身が靈にしびれてしまふ。とにかく、凄い現実なんです。聖書のこととに福音書の現実は、のんきな顔して読めない。

●時は満ちた

¹⁵『時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』

「カイロスが満ちた」

というのは、別な言葉でいうと、

「ユダヤ教は行き詰まつた」

ということです。今、時は満ちた。キリスト教は行き詰まりました。ユダヤ教じやない。一般にキリスト教は行き詰まつてゐる、ヨーロッパが。ヨーロッパの神学もダメだ。

私が『無の神学』なんて書いて、誰もこれを受けとらない。いいんだよ。本ものはそんな簡単に受けとられない。

「時は満ちた」

とはそなんだ。行き詰まつた時が、「時は満ちた」なんです。

「八方塞がりだと、天界が開けてゐるぞ」

というのが「時満てり」です。大分みなよくなつて準備がよく出来たから、それで「時が



満ちた」と、そんなんじやない。

「もうどうにもならなくて行き詰まつた」ということ。

今、正直、世界は行き詰まっている。第三次戦争が来たらどうなるんですか。何のかんの言いながら、結局ものすごい核軍備の競争でしうが。恐ろしいね、レーザー光線で何かするとか。

「人類は亡びるから軍備はよそう

と、大政治家がなぜそれを言えないか。何が大政治家か。リンカーンやグラッドストーンみたいな大政治家なんか一人もいない。

●「神の国は近づいた」

「神の国」とは、神さまの支配する所、天国。マタイ伝ではよく「天国」と書いてある。

「終末は近づいた」

と言つてもいいわけです。とにかく、新約聖書は終末時において書かれたところの、福音書であり、パウロ、ペテロ、ヨハネの書翰であり、黙示録である。そして、キリストはこの行き詰まりの所に天国の核を、中核を現じた。天界をそこに本当に現じたんです。だから、「天国は近づいた。いや私は今、天国をお前たちに、十字架にかかるまで見せてやるぞ」

と、こういうことです。福音書はその新天新地の相がそこに時間を越えて投影されているわけです。黙示録は凄いけれども、福音書は黙示録が指しているところを、実はちゃんと現実に現している。キリストというひとは大変なひとです。お釈迦さんだってとてもかないやしない。東西古今ただ独りのひと。悟りじやないんだ。現じたんだ、天国を…（異言）…。

福音の中に信、住する。そういう世界です。新約聖書の少し安いのを買って、福音書のところだけ破つてポケットにでも入れて、電車の中でもどこででも読んで、いつも天国にいてくださいよ。

「私は天國人でござる。この世に、このどうにもならない世の中に、天国を現じてやるぞ」

と。私たちはそれだけの使命を持った一人一人なんです。キリストは体現しました。我々もまた、我々を通して、キリストの力が体現しないことには。それは、正に「行」の世界で、福音はそのような行であるということを、私ははつきり今回は言いたい。

「信仰によつて義とされる」

なんて、そんなお題目を言つてゐる世界じやない。

「行じない者は空しい」

とキリストは言つてゐる。今私が言つてゐる「行」はいわゆる「信仰と行為」なんて、そ



んな分けていった行為じゃない。

「まあ信仰はだいぶよくなつたからこれから行為しましよう」

と、そんな行為がなんの行為か。もう、私は言葉にならないです、正直。

「なんじら回帰せよ。私の所に帰ってきて、福音を信ぜよ」

も、「エン」（の中に）という字が使つてあつて、

「福音に在つて信住せよ。福音に信じ生きろ、信じ住め」

ということだ。そういう訳を私は大胆にしたい。そんな言葉はない、新しく作つたんだ。

「福音の中に信住する」

と、ギリシャ語も三格の使い方がしてある。

「福音に信住していてもらいたい。福音に生きて居れ」

ということだ。本当に生きていると。「信する」という言葉がどうも躊躇になつて困る。

●行為をもつて身証せよ

¹⁶イエス、ガリラヤの海にそいて歩みゆき、シモンと其の兄弟アンデレとが、海に網投^うちおるを見給う。かれらは漁人なり。^{すなどりびと} ¹⁷イエス言い給う『われに従^{すな}いきたれ、汝等^{すなど}をして人を漁^{すなど}る者とならしめん』

「お前たちを人を漁る者にするぞ、伝道者にするぞ」と。私はつかりが伝道者じやない。あなた方一人一人みんな伝道者です。マルチン・ルターの宗教改革を、もうひとつ我々は改革しなければならない。

「隣人に行為をもつて語れ」

というんです。それが本当の伝道者です。口で福音を説明するんぢやない。

「行為をもつて語れ」

とは、

「行為をもつて身証^{あかし}せよ」

ということ。

「福音とはそういうもんですか」

と、その人の行為をみて福音が伝わっていく。

親の教育も先生の教育も、率先垂範という言葉があるけれども、その先生の、親の生き方が自然に子供に伝わっていく。それが一番本当の教育の仕方です。

「怠けるな、勉強せよ」

なんていくら言つたつてダメなんだ。却つて罪を刺激する。

「よく勉強するねえ」

と言つてやる。まだしてないのに、よくするねえと。

「それは悪かつた」



と思つて勉強する。

「あの先生はやっぱりよく勉強しているなあ、よし私もやらなくては」と、こうならなくては。先生が本当に勉強しているかは講義を聞いていれば分かる。また、その先生の熱意を持つた語り方で分かる。

私は、小学校から大学まで思い出すと、そういう熱意をもつて、全身をもつてやつてくるさつた先生は、やっぱりいつまでも恩を感じて思い出します。特に、小学校の校長先生は素晴らしい。月曜日の朝の講堂修身という、20分か30分、みんな全校生徒が立つて聞いていた。みんな吸いこまれるように聞いていた。私は中身はもう忘れてしまつたけれども。本当に情熱を傾けていたね。

とにかく、そういう実存そのものが、行為そのものが、本当の教育になつていくわけです。日教組なんてのは一番困る。日本の教育を害する。大体、教員が俸給が少ないの多いのと騒いでいるのは、何やつていてるかというんだ。冗談じゃない。

●直ちに福音

¹⁸彼ら直ちに網をすてて従えり。

この「直ちに」という言葉が、マルコ伝に41回出でくると学者が調べた。それくらい「直ちに」という言葉がある。だから、これを「直ちに福音」という、即行の福音なんです。^{そくぎよう}直ぐなんです。ギリシャ語で「ユーテオス」或いは「ユートウス」という字ですけれども。直ちに、直ぐ網を棄てて従つた。ということは、直ぐ行為に移るわけです。

「先ず考えてから、一二三日考えてから、一週間たつてから」

なんていうんじゃないんだ。福音は。聞いたら、直ちに。キリストに聞いたら、「直ちに網を捨てて」とは自分の

「職業を捨てて」

ということだ、彼らにとつては。

「何でもかんでも職業を捨てろ」

といふんじやない。そういうことではありますんけれども、我々が一人一人やつてゐる事柄において、「即^{そく}」の福音を受けて、やつていることにおいて福音的な行動がグングン出てくるわけです。学問においても、何においても、全部それが「即」で出て来る。ヒルティが、「人から手紙をもらつたら直ぐ返事を書きなさい」と言つた。私はたいてい実行している。

やっぱり、「即」で、即的に動く人は仕事をする。事業家もそうじやないです。行動が速い。即決していく。ひらめきをもつて決断する。熟慮断行なんていう言葉があるけれども、あんまりゆつくり熟慮したつてしようがない。そのうち眠くなつてくる。それは、直ぐ閃



きが来る。これは福音の非常に素晴らしいところなんです。即、行動に出る。こういうようにして、即、キリストに従つて行つた、この姿が最も福音的な在り方だ、というわけです。

「ああそうですか、それ信じます」

なんて、口でもつて「信じます」ではないんだ。

創世記の22章、アブラハムはどうしたか。

「¹これらの事の後神アブラハムを試みんとて、之をアブラハムよと呼びたもう。彼言う、我ここにあり。²エホバ言い給いけるは、爾の子爾の愛する獨子即ちイサクを携えてモリアの地に到り、わが爾に示さんとする彼処の山に於て彼を燔祭として献ぐべし。³アブラハム朝つとに起きてその驢馬に鞍をおき、二人の若者とその子イサクを携えかつ燔祭の薪をわりて、起て神の己に示したまえる処におもむきけるが…」

アブラハムは何も返事はしないんだ、さつそく行動に移つた。

「アブラハムは行為によつて義とされた」とヤコブ書に書いてある。それがこれです。

「アブラハムは信仰によつて義とされた」

とパウロは言った。パウロが言つた「信仰によつて」と、ヤコブ書の「行為によつて」も本当は同じことなんだ。ルターが、ヤコブ書を「藁の書翰」と言つたのは、ヤコブ書の読み違ひだ。ルターもパウロもあの時は、どうしても「信仰」一点張りで言わざるを得ない時だつたから、大いに「信仰のみ」と言つた。けれども、パウロもルターも最も行為的な人ではないですか。「信仰のみ」と言つた人が最も烈しい行為をした。パウロはあの世界伝道を、コリント後書11章に書いてあるあれほどの沢山の困難を突破したでしょ。ルターも、「いつ焼かれて殺されても構わない」と言つて、ウォルムスに出かけて行つたでしょ。

●信行一如

これは、信仰が本ものだから。信行一如です。パウロにしても、ルターにしても、この信という世界が、全存在的に受けとる世界なんです。頭で信じたんじゃない。全存在的に体受することは、烈しい「内的な行為」なんです。はげしい内的な行為が、即、外的な行為として出て来る。そういうことはつきり、なかなか言わない。

私もさんざん非行為的な人間だったけれども、とにかく、35、36才から集会を始めた。私は時々言うでしょ、

「一年かかつて一人でいいから本当にひつくり返してみろ。そして連れて来なさい」と。どうだな、連れて来たかな。それだけの迫力をもつて迫つていけば、人は動くんです。



自分で中で、本当にキリストが生きてしようがないんだ。そうすれば、その行為は、全存在をもつて語っているのは、言葉だつて行為ですよ、ある意味においては。

親鸞が諸国を歩き回っていた。北の方に行つて、ある晩に越後の柿崎に泊まつた。その宿屋の亭主がひどい男で、なかなかろくな扱い方もしてくれなかつた。けれども、親鸞は炉端でほだをくべながら、法門を説いた。夜がだんだんふけていつた。話がだんだん佳境に入つた。始めは、うるさいなあと思つて聞いていた亭主がいつしかしく泣き出した。南無阿弥陀仏と言つて、涙まじりに声を出す。

「柿崎にしぶしぶ宿をとりつるをあるじの心熟したりけり」

と――こゝは柿崎だから、しぶ柿が熟したように――言つたという一つの挿話がありますが、本当にそうです。お客様が来て、しゃべつていううちに、知らない間に福音の話になつてしまつて、私も時々それをやる。喜んで帰つていく。喜んで帰つていくけれども、集会に来ようとまでする人は、なかなかない。たまにはあるけれども。

とにかく、福音はもう遠慮している時ではない。世は末ですから。学生でも友人に、社会にでても会社の人々に。いわゆるお説教式な話し方はダメです、もちろん。

「隣の人々に、この人に福音を語つてやろうかな」

と、ちょっと見れば分かる。そしたら、チョコレートでも出して、

「どうですか……」

と、一緒に食べながら（笑）。まず、チョコレートの行為から始まるんだ。そういうのが伝道なんですよ。

「福音とは……」

なんて、七面倒臭いことを言つたつてダメだよ。まあ、そういうことでもう少し八方破れ的にやつてください。

●始めに行爲ありき

少し、ゲーテの言葉を引用しよう。

「始めに言ありや」(Im Anfang war das Wort.)

とある。それを、ゲーテは、ファウストをして詫せながら、靈の閃きでもつて、

「始めに意があつた」(Im Anfang war der Sinn.)

と訳した。そうやって「^{いじら}めんわん」というものは一切に作用し得るであろうか。「意味」というものではまだダメだ。あ、そうだそうだ、

「始めに力があつた」(Im Anfang war die Kraft.)

と、こう訳すべきだ。そう書いているうちに、そこに留まつてゐるところができないように、何か閃きが来て、靈（ガイスト）が私を助けて、ついに落ち着いてこう書くことができるようになつた。



「始めに行行為ありや」(Im Anfang war die Tat.)

と。福音は最初は「行為」だといふことです。

モーセの十誡が与えられる前に、出エジプトという驚くべき行為を神さまはさせた。力ある恵みの行為をもつて、イスラエルの民を出エジプトさせた。それから、

「お前は私の民である」

といふ契約をする時に、その保証として、ある一種の条件として、「律法」を与えた。

「これを護るならばいつまでも我が民である、護らなかつたらダメだぞ」

と。律法といふのは、やうこつ神さまの要求をもつてゐるわけです。

本当は、「言・意・力・行」は四相一貫なんぢ。やゝまで、彼は言つてないけれども。

●ターム・ウム・ターム

『ウイルヘルムマイスター』の終わりの方の「遍歴時代」という中に素晴らしい言葉がある。

第三卷の第一章のといへに、

「汝、いの人生において何事をも後に延期してはいかん。行為また行為であれ。」

"Du im Leben nicht verschieben, Sei dein Leben Tat um Tat."

即やれと。明日もあるから、なんて思つてはダメだ。あつ今日はまだやつてない、と思つたら飛び起きて、そしてやつてから眠れと。

「明日がある、明日がある、今日ばかりじゃなこゝ、こゝめ怠け者は言つてゐる」

"Morgen, morgen, nur nicht heute, sprechen alle faulen Leute."

といへ、そつこへりわざがある。何事をも延ばしてはいかん。

「汝の人生は、行為また行為（ターム・ウム・ターム）であれ」

と。それだから、ゲーテという人はあれだけの大変な著作を——ゲーテ全集は一四三巻だよ——よくも書いたなあと思つ。驚くべきものだ。ちょうど私と同じくらいの年配だ。私の何倍書いたか分からぬ。大変な人です。

何も書くことばかりがいいんじゃない。行為そのものが文字なんだ。超一級の人物は何も書かない。ソクラテスも孔子も、キリストもお釈迦さんも何も書かない。みんな弟子どもが書いている。あなた方、何も書がないと、お釈迦さんやキリストと同じことになる(笑)。私なんかダメだ。

生活そのものが文字、生活そのものが「活字」という。それが活きた文字、活字です。

「生活そのものが活字であれ」とこへり。

「汝らは活ける書なり」

とパウロが言つたでしょ。キリストの活ける書である。

我々自身が聖書の続巻である。あなた方自身が使徒行伝の続きを書いている。その文字



は天界に映つてゐる。神さまの卷物の中には、それは書いてある。地上の歴史なんていうものはあてにならない。神の卷物に書いてあるのは、これは本ものだ。黙示録に書いてある通り、神の卷物に記されてある。神さまは下らないことは書かない。その人の本もののところだけを書く。悪いところは神さまは消してくださるんだ、キリストの恩寵で。

「お前のここだけは本ものだつた」

と。それが

「汝の生涯は、行為また行為（タート・ウム・タート）であれ」

ということです。福音はそのような、源行的なもの、根源的な行だ。「ウルタート」という。いわゆる派生した行為ではない。全存在的な行為です。楽しいですよ、そういうようになつたら。明日から——今からだ、即だから——即、そのように生きてください。そうしたら、楽しくなる。何か知らんけれど、力が出て来るから。

それでは、その行為ができるかというと、力んだつてできない。

●聖靈の権威

²¹ 斯て彼らカペナウムに到る、イエス直ちに安息日に会堂にいりて教え給う。

²² 人々その教^{おしえ}に驚きあえり。それは学者の如くならず、權威ある者のごとく教え給うゆえなり。

これも「直ちに」です。人々はその教えに驚いた。「權威ある者のごとく」ではない、「權威ある者らしく」

語り給うた。「ごとく」ではない。真似しているんじゃない。聖靈が来ると、權威なんて考えなくたつて、自然に權威が出てくる。ヒルティーの書いているものになぜ權威があるかというと、彼は聖靈の角度から書いているからだ。

²³ 時にその会堂に穢れし靈に憑かれたる人あり、叫びて言う、²⁴『ナザレのイエスよ、我らは汝と何の関係^{かかわり}あらんや、汝は我らを亡^{しようじや}さんとて來給う。われ

は汝の誰なるを知る、神の聖者なり』

「関係あらんや」どころのさわぎじやない、本当は。大きなかかわりがある。惡靈といふ奴は、とにかく靈の世界は見えるんだ、相手が神の子であることが。普通の人には分からない。特にナザレの、キリストを一番肉的に知つてゐる連中は、キリストが分からぬから、

「なんだ、この頃変なことを言つたりやつたりしているけれども」

なんて言う。だから、キリストはナザレを出でしまつた。

「預言者は故里^{ふるさと}にては容れられない。家の者は敵だ」

なんていう、キリストの言葉はああいうところから來てゐる。

²⁹ 会堂をいで、直ちにヤコブとヨハネとを伴いて、シモン及びアンデレの家に入り給う。³⁰ シモンの外姑^{しゅうご}、熱をやみて臥^ふしたれば、人々ただちに之を



イエスに告ぐ。³¹イエス往きて、その手をとり、起こし給え巴、熱きりて女かれらに事^{つか}う。

キリストという人は、神の靈、神の力に満ち溢れた人だから、近づけばもうそれで、どうかなつてしまふ。手をとれば熱が去つて起き上がりてしまふ。とにかく、大変な力を持ったひとだ。そういうキリストを本当に、眼前に浮かべるようにして福音書を読んでござらん、圧倒されてしまうから。ビリビリして来るから。

「そうですか」

じゃない。私はなぜ元氣かというと、福音書やなんかからそういう力が来るからなんです。キリストが下さるところの力はちょっと違つた力だ。

●キリストの無者

だから、福音書というのは、読むのではない、食べるんです。

「我を食らえ、我を飲め」

と言われたでしょ。本当にキリストにぶつかつていると、「我を食らえ、我を飲め」なんです。靈的な力が正に具体的に来るんです、文字の背後から。

「手をとれば、直ちに…」

と、私も時々直ちに人を——私を通してキリストの力が働いて——癒した色々な事が既にありました。それは、こつちがぶつぶれるからです。

「信仰がだいぶ上達したから、靈的になったから」

と、そんなことではない。ぶつぶれて、自分がないから、キリストがあるんじゃないですか。だから、「無者」といつている。私は

「キリストの無者」

なんです、本当に。誰が何といつても、私ははつきりその事を言います。私が「何か」に、「サムシング」に、勇者になつたらダメなんです。キリストが、

「信仰うすき者よ」

と言うと、今度は信仰が問題になつて、

「さあ私の信仰は?」

といつて一生懸命に信仰を問題にする。ちつとも進行しないんだよ、そんなことでは。捨ててしまえばいいんだ、

「自分の信仰

なんものは。信仰も私しないんだ。

「何もありません」

と。そうすると、

「キリストの信」



が入つて来る。キリストの信が、本願の信が入つてくる。これは大変なもんです。だから、私はなぜ祈り入るかというと、祈り入つてキリストの信をいただくわけです。これが、同時に靈の力ですから。「ワッショイワッショイ」と祈らなくたつていい。黙つて祈つて、力が来るんです、ものすごく。蚊の鳴くような声だつて何だつていいよ、本当に入つているのなら。キリストを身体で受けとる世界なんだ。突入と言つてもいいし、体受と言つてもいい。

●十字架の門

朝まだ暗き程に、イエス起き出でて、寂しき処にゆき、其処にて祈りいたもう。

これは力の源泉です。父の中に、父の懷に入つて、祈り入る。祈り居たもう。入らなくてはいかん。神さまの中にキリストは入つて、私はこのキリストの中にまた入つてしまう。

「神・キリスト・我」

という三重の内接の円になる。

とにかく、本当にその世界に入つてくださいよ。

「自分の信仰がどうだ、聖書の読み方がどうだ、自分は少し理知的でどうだ」

なんのかんのと、そんなことはどうでもいい。全存在をそのままあるがまま、キリストの中に入れることです。

どこから入れるんですか？ 十字架ですよ。十字架という門からです。

「我は門なり」

というのは、十字架の門ですから。

「お前は、全部私が贖いとつた」

というその門ですから。入らざるを得ないんです。何も遠慮する必要はない。絶対恩寵の世界だから。

「過去も現在も未来も全部お前は、お前という罪びとは全部私が贖いとつたから心配要らん」

「はいっ」

と、それだけの話だ。そして、平伏して入つて行く。すると、俄然、上から力が来る。

なぜ、私みたいに簡単になつてくださいないんですかね。みんな、利口すぎて困る。私みたいにバカにならないとね。本当にみんな利口だね。私は本当にバカで単純で、いつまでも子供なんだ。

●行為は一切である

ゲー^テも言つてゐる。『ファウスト』の第一部第四幕の、高い山の中の瞑想のところで、



「行為は一切であつて、名譽でも何でもない」

「ディ タート イスト アッレス」（Die Tat ist alles, Nicht der Ruhm.）

と書いてある。

「行為的であるといふ」とは人間の第一の使命である。本当の男はたゆみなく活動するものである

と。それは、当時のキリスト教がいかに力がないか、ゲーテは嘆いたから、なおさら逆にこう言いたかつた。

キリストは非常に行為のことを言つておられる。

⁴¹イエス憫みて、手をのべ彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言い給えば、⁴²直ちに癪病さりて、その人きよまれり。

とにかく、即、すべて働いてしまう。

2章には、中風のことが書いてある。沢山、各頁に驚くべき」とが書いてある。

「床をとりて家に帰れ」

なんて、中風の者を癒した。

⁸イエス直ちに彼等がかく論ずるを心に悟りて言い給う『なにゆえ斯ることを心に論ずるか、⁹中風の者に「なんじの罪ゆるされたり」と言うと「起きよ、床をとりて歩め」と言うと、いざか易き。¹⁰人の子の地にて罪を赦す権威ある事を汝らに知らせん為に』——中風の者に言い給う——¹¹『なんじに告ぐ、起きよ、床をとりて家に帰れ』

キリストは罪を赦す権威を持つてゐる。そんなことは今まで分からなかつた。

¹⁷イエス聞きて言い給う『健やかなる者は、医者を要せず、ただ病ある者、これを要す。我は正しき者を招かんとあらで、罪びとを招かんとて来れり』

パリサイ人たちに言つてゐるんだ。

「本当は、万人が罪びとで、お前たちは罪びとでない顔してゐるけれども、とんでもない偽善者だ」

と本当は言いたい、このパリサイ人なんていう者には。

「自分は健やかだなんて思つてゐる者はどうでもいい。本当に自分は病める者であると思つてゐる人に、私は来た」

と。どんなに健康でも、どこかは欠陥があるんでしょうね。もちろん魂の世界は、みんな破れ器だ。どんなに整つたような顔してたつて、みんな本当は破れている。偉そうな顔したつてダメです。精神的にも肉体的にも破れ器です。ところが、この破れの中に、破れざるもののが入つて来るんだ。破れをただ整えようとしたつてダメなんだ。破れのまんまでいいから、キリストという生命を受けとると、破れの中から破れざる天衣無縫的なものが中から形成されていく。蛹がやぶれて、チョウチョが出て来るようなわけだ。キリストは私



たちの身心の、身心共に、医者なんです。

「それでは、もう医者にかかるない」

なんて、何もそういう妙なかたくなな信仰じやない。お医者さんにかかつたつて、薬をのんだつていい。けれども、それはただ補助に過ぎないのであって、本当の生命はキリストから来る。その角度は絶対に失つてはいかん。ヒポクラーテスは

「自然の力にたよれ」

と言つた。しかし、この自然の力は、自然の中に浸透している「神の力」と言つてもいいくらいだ。ゲーテはそういうようなことをちゃんと観みている人だつた。

●キリストの新しさ

今までのは、旧約は古いんだ。けれども、今度は新しくなつた。

²²誰も新しき葡萄酒を、ふるき皮袋に入ることは為せ。もし然せば、葡萄酒は袋をはりさきて、葡萄酒も袋も廢らん。新しき葡萄酒は、新しき皮袋に入るるなり

と。これは「新しき葡萄酒」です。キリストの新しいのは古びない本当の新しさです。

「今までの律法というような革袋に入れてはダメだ。福音という革袋に入れろ」

と。キリストの福音は、そういつた「新しき革袋」ですから。そこにキリストという生命体が入つて来る。キリストという生命の血が入つてくる。

また安息日のことが書いてある。悪鬼を追い出した事も書いてある。3章のキリストの
譬^{たとえ}話^は面白い。

²⁷誰にても先ず強き者を縛らずば、強き者の家に入りてその家財を奪うこと能わじ、縛りて後その家を奪うべし。

なにか、強盗の奨励みたいなことを言つてゐる。

²⁸誠に汝らに告ぐ、人の子^{すべ}らの凡ての罪と、けがす瀆しとは赦されん。²⁹然れど聖靈をけがす者は、永遠に赦^{ゆる}されず、永遠の罪に定めらるべし。

「聖靈に向かつて、そんなものはと言つていると、これはどうにもならんぞ」ということです。あの罪この罪を犯して滑つたり転んだりはまだいいけれども、聖靈に対して意志的に反抗したら、それはもうサタンだから、サタンは亡ぼされる。サタンになめられてはダメだよ。

「サタンよ退け！」

とキリストはおっしゃつた。ルターも言つたとおり、

「白きサタン」

というのもある。見かけ上、大変よさそうな顔しているけれども、逆に、「黒きサタン」よりもなお悪い。偽善的なサタンがいる。世の中にはそういう現象がよくある。しようがな



いね、これは。

●神の御意を行う者

キリストは、身内の者たちは別に親しくないわけではないんだけれども、

³¹ここにイエスの母と兄弟と来りて外に立ち、人を遣してイエスを呼ばしむ。

³²群衆イエスを環りて坐したりしが、或者いう『視よ、なんじの母と兄弟・姉妹と外にありて汝を尋ぬ』³³イエス答えて言い給う『わが母、わが兄弟とは誰ぞ』³⁴かくて周囲に坐する人々を見回して言い給う『視よ、これは我が母、わが兄弟なり。誰にても神の御意を行うものは、これわが兄弟、わが姉妹、わが母なり』

キリストはただ血肉のことと言つてない。ここでも「御意を行うもの」ではないですか。ただ聞く者ではない。

「朝に道を聞くならば夕に死すとも可なり」

という有名な孔子の言葉があるけれども、道を聞いただけではダメなんです、道を聞いて行わなくては。

「神の御意を行ふ者は、これわが兄弟、わが姉妹、わが母なり」

と。この最後の言葉が一番大事だから、ここに掲げたわけです。「兄弟姉妹」といつたって、神の御意を行う者が、神の御意に実存している者が、本当の兄弟姉妹だ。「信ずる」とも書いてない。「聞く」とも書いてない。「行う」と書いてある。

今までの福音の掴まえ方は、もちろん間違つては申しませんよ、けれども、今は本当の意味で、行為がいかに大切なものであるかということです。ということは、行為を切り離して言つているんじゃない。そこが、カトリックはまた別な意味で、行為に躊躇している面がありますけれども、プロテstantはどうもそこにいくと、そこがどうかと思う。本当の意味で、生きてくださいよ。本当に生きるというのは、そのように動いていなければダメなんです、実証していなければ。行為とは、別の言葉でいうと、福音の実証です。事実をもつて身証^{あかし}していなければ。

「証しひとたれ」

ということなんです。証しひとは、ただものを言つてはいるんじゃない。

そうしたら、もう少し極端に言うと、

「マリヤが私の母じゃないよ、本当にマリヤがやつてるのなら、母だけれども、そ

うでなければ、マリヤだつてダメなんだ」

と、それくらいのことがキリストの言葉の裏にはなきにしもあらず。

「なぜ、私を尋ねていますか。お父さんお母さん、私はここで神さまのことにたずさわっているのに」



と、12才の少年イエスが言つたじやないですか、神殿にいた時に。あれは「神さまのことだずきわつてている」

という言葉です。神さま、父のことだずきわつてている。もうはつきり、天の神さまが、キリストにはかけがえのない唯一人の父なんだ。何も、ヨセフをけなしているわけじやないけれども、ヨセフのことは一つも出てこない。

相対的な意味で、今の若い人たちが親を親とも思わないようなのは決して良くない。けれども、本当のお母さん、本当の兄弟、本当の姉妹は、何も血肉のことじやないんだ。情的には、血肉の人に対する情的な近さというものは、そりや正直あります。けれども、情的な近さでなくて、本当に生命的に近いのは一緒に神さまのことをやつてている人たち、神さまに於て生きている人たち。それが、親であり姉妹であり兄弟である。本当に親しい。いわゆる親戚なんて、普通はあんまりつきあいはない。ところが、あなた方は親戚以上に親しいわけだ。

●キリストの中に（エン・クリスト）

それでは、その「御意を行ふ」とはどういう事か。今度は、行為の本論に入るわけです。何といつても、十字架を通つてキリストの中に入らなくては。キリストの中に入つて、聖靈の力をいただく。

キリストの中に本当に入る。そうすれば、力が生命が来るから、行為せざるを得ない。そのことを、マルチン・ルターが、あの『ローマ書序文』の中で書いている。

「ところで、信仰は我々の中における神の業である。

信仰は神さまの業です。「自分で信じた」なんていうのじやない。

その業というのは我々を変えて神さまから生まれしめるというのものである。
ヨハネ伝第1章にあるとおり。

そして、古いアダムを殺す。

というのは、「生來の我」を殺す。

我々を、心において、気分において、また思いにおいて、またあらゆる力において、全く別な人間にてしまつ。しかも、己と共に聖靈をもたらすものである。

この信仰というのは、神さまの業だからね。

おお、信仰とは何と生き生きとした、また活動的な、仕事をする力強い事柄ではないか。間断なく善きことをなさないではいられないほどのものである。それほどにまで、信仰とは力強い、いきしきとしたものである。信仰はまた次のことは問わない。善き業が為さるべきであるが、或いは為され得るが、そんなことを聞く前に、既に信仰はその行為をやつてしまつていて。そして、いつもその行為の中に居る。」

「絶えずその行為をやつていてる」



という、そういう素晴らしい言葉です。だから、ルターにとつても、信仰が本ものだと、それは動かざるを得ない、行為せざるを得ない。

「それは聖霊の力による」

ということがその中に含まれている。そうすると、信仰なんていうものは、自分で考える必要がなくなる。上からグーッと来て、神さまが御霊の力でもつて働いて動くから、動かざるを得ない。

この「ざるを得ない」という世界が一番本ものの世界です。

「やろうか、やるまいか」

じゃない。やらざるを得ない、かくせざるを得ない。動かざるを得ない、人に語らざるを得ない、人に与えざるを得ない、人を助けざるを得ない、お手伝いせざるを得ない。何でもいい。そのようにして動いていく。結果はどうだつて構わない。かく在らざるを得ないという。

「ざるを得ない。止むに止まれない」

という、それが本当の在り方だ。これは『言志録』の中の西郷南洲が大好きな言葉です。

そうすると、生命が^{ほとばし}遊らざるを得ない、生きざるを得ない。疲れを知らない人になる、眠くはなつても。

「自分たちは少し力んでも、直ぐ疲れてしまうけれども、聖書の中には驚くべき源泉があつて逛つてくる」

というようななことをゲーテがちゃんと言つてゐる。普通の人はみんな、ゲーテを見損なつてゐる。本当に福音をつかんでいない人はいくらゲーテを読んだつて、或るところまでしか分かりません。だから、私みたいな者が言わざるを得ない。

信行一如のその行為が、即行の福音である。即行の現実でなければ、その人は、信仰はどうかと思う。自分は本当に生きているかということは自分で分かる。人がどう思うか思わないかは、そんなことはどうでもいい。自分で、私は本当に生きているか、福音を本当に生きているか、自分に問うたらしい。

あなた方がなさることは何でもいいから、生涯を通して、力強く、それを通して証してください。我々はこの点で、一歩も退いてはダメだ。非常な歴史的使命を担つてゐるわけです。地道に、一人、二人、三人と証して伝えていく。

「二、三人わが名にあつて集まる所に、我也共に在り」という、それを実証していくください。本当は、皆さんのがこれだけの数の召団があるわけなんだ。どしどし召団をつくってください。何も名前ばかり掲げる必要はないけれども。事実そうであつていただければ、結構なんです。

